

Newsletter

No. 6 November 2012

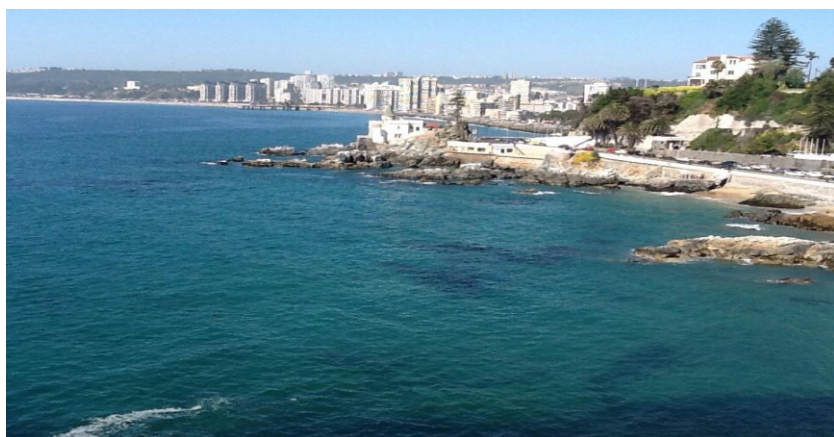
東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

夏到来

日本は晩秋の頃、これから冬を迎えるところと思いますが、南半球に位置するこちらチリでは、いよいよ夏がやってきます。チリの夏は日本とは異なり湿度が低く、大変過ごしやすいのですが、一方晴れた日には陽射しがとても強く感じます。オゾンホールがチリ・アルゼンチン南部にかかって存在しているとのことで、紫外線量は日本の6倍という説もあります。チリ気象庁(Dirección Meteorológica de Chile)では毎日紫外線量(UV-B)を測定し公表しています。サンティアゴではこの10日間ほど、最も紫外線量が高度であるExtremo(極度)となっており、日中の外出を避ける、外出する場合は日陰を探す、長袖シャツ・サングラス・帽子の着用、日焼け止めクリームの使用、などが気象庁により推奨されています。最近まで爽やかな夏の到来に浮かれていましたが、このような話を聞き空恐ろしくなっているところです。

チリニュースレター第6号では、11月に行われた東京医科歯科大学ミッション団のチリ・パラグアイ訪問、進行中の大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の報告を中心に、LACRCの活動をお伝えしてまいります。また今号より10月にスタートした医学科4年次プロジェクトセメスター学生によるチリ滞在記もお届けいたします。

河内 洋 LACRC 人体病理学分野



リゾート地「ビーニャ・デル・マール」



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENEC最新情報	2
TMDUとチリ	4
活動報告	5
プロジェクトセメスター	7

PRENEC最新情報

本年5月に開始されたラテンアメリカ共同研究拠点（Latin America Collaborative Research Center, 以下LACRC）のメインミッションであるPRENECの最新情報をお伝えいたします。PRENECでは、第5州のバルパライソ、第12州のプンタ・アレナスにおいて、それぞれ年間3,000人、サンティアゴにて5年間で2万人を対象にiFOBTによる便潜血反応検査を実施することになっています。

サンチアゴでの拠点となる内視鏡センターがオープン

サンチアゴにおけるPRENECは、サン・ボルハ病院の日智消化器病研究所にて展開されることになっています。この研究所には、既に内視鏡センターが設置されていますが、PRENECの中心拠点として利用するため、8月より改修工事を開始し、10月末には工事が完了、11月20日に新内視鏡センターのオープニングセレモニーが開催されました（次項）。

サンチアゴでは、この新内視鏡センターで大腸内視鏡検査が行われる予定ですが、サン・ボルハ病院では、通常の検査も現在1,000人の待機患者が発生している状況です。また、チリ国内全体でも同検査を実施できる医師が少ないという問題が存在します。

この現状を打開するため、今回開設されるセンターはPRENECの拠点となるだけでなく、チリ保健省からの支援を受けた内視鏡医育成の場として稼動することになっています。研修期間は3ヶ月間で、シュミレーターによるトレーニングのほか、大腸内視鏡検査を指導医の下で実施することになります。研修は、日智消化器病研究所所長のエステラ医師、CLC大腸肛門科のクロンバーク医師のほか、LACRCの田中助教が指導医となり、大腸内視鏡検査の診断ができる医師を年間8名ずつ育成していく計画です。

新内視鏡トレーニングセンター

目的：大腸内視鏡医の育成カリキュラム

- ・トレーニング
 - －シュミレーターによるトレーニング
 - －内視鏡診断技術の習得
- ・実習
 - 大腸内視鏡検査100件の実施
 - －観察＋報告書の作成（30件）
 - －指導医の監督の下、引き抜き（30件）
 - －指導医の監督の下、挿入＋引き抜き（40件）
- ・内視鏡医認定の必須条件
 - －盲腸までの挿入（90%以上）
 - －引き抜き時間（8分以上）
 - －PRENEC基準に基づいた報告書の作成



改修工事が終了した新内視鏡センター



内視鏡ブース内部の様子

新内視鏡センター 開所式

去る11月20日、新内視鏡センターの開所式が執り行われました。開所式には、村上秀徳・駐チリ日本国特命全権大使ならびにチリ保健省、PRENEC関係者など約60人が招待され、本学からは大山喬史学長、江石義信教授（人体病理分野）やLACRCスタッフが出席いたしました。

当日は、チリ保健省医療ネットワーク局長のカステージョ医師からの祝辞を賜り、「新内視鏡センターがチリだけではなく、ラテンアメリカにおける内視鏡医育成の最先端の場になるようにチリ保健省としても協力を惜しまない。」と述べられました。

また、JICA（日本国際協力機構）チリ支所、サンチャゴ日本人学校、日智商工会議所からも関係者が出席されました。

なお、同時にサン・ボルハ病院のロブレス病院長、CLCのデヒアス病院長、プンタ・アレナスのクリニカ・マガジャネス病院（以下、マガジャネス病院）のバルナバ医師、バルパライソのエドアルド・ペレイラ病院（以下、ペレイラ病院）のベレンゲル副病院長が「PRENEC推進のための協力枠組協定」を締結し、今後のPRENECへの更なる支援体制の確認を行いました。



PENEC推進のための協力枠組協定に署名するロブレス病院長

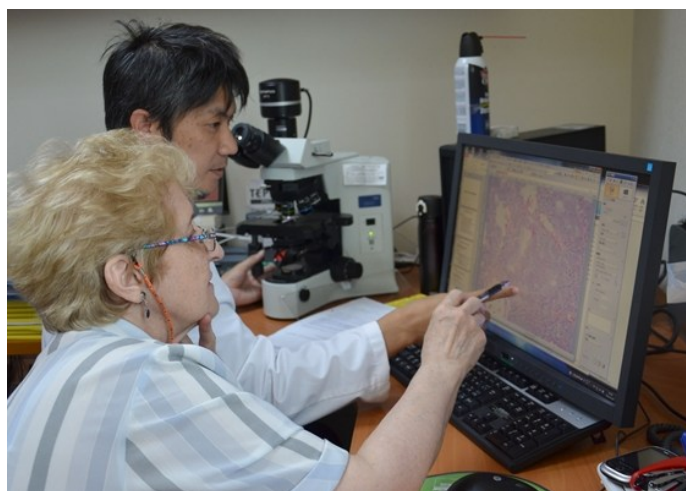


新内視鏡センターを見学する関係者

地方でのPRENEC

第12州プンタ・アレナスのマガジャネス病院では、プンタ・アレナスから北へ246km離れた場所にあるプエルトナタレスで、PRENECのキャンペーンを行いました。この町は、近辺に世界的に有名なパタゴニア国立公園が存在することから、観光業が発達しており、現在約1万9000人の方が生活をしています。マガジャネス病院のPRENECチームは、2日間で約260名のPRENECの登録を行い、うち250名がiFOBTを終了しています。この結果、プンタアレナスでは、約2000名がPRENECに登録済みとなりました。

PRENECスタートから5か月が経過し、診断・治療方針についてディスカッションが必要なケースも増えてきています。そこで、定期的にペレイラ病院、マガジャネス病院、CLC、LACRCスタッフが参加した症例検討会を定期的に開催しています。症例検討会は現在までに3回開催され、各病院の検討が必要な症例について、ディスカッションを行い、診断・治療方針を決定しています。また、病理分野においては、病理診断の異なるケースを検討するため、各拠点の病理医とLACRCの河内講師による個別ディスカッションがスタートしています。



マガジャネス病院のバステルナク病理部長と河内講師によるディスカッション

寄稿：TMDUと私

1968年に本学の村上忠重教授(当時)がチリを始めて訪問したことをきっかけに、東京医科歯科大学とチリの40年以上に渡る交流が始まりました。特に、村上教授が創設したサン・ボルハ病院の日智消化器病研究所では、現在でも村上教授の教えを継いだ医師たちが活躍しています。本号では、日智消化器病研究所の所長であるリカルド・エステラ医師にご寄稿いただきました。

リカルド・エステラ医師 日智消化器病研究所 所長

日智消化器病研究所は、チリ人医師ペドロ・ヨレンス博士により、1978年に胃癌診断センターとして設立され、1990年には消化器病研究所としての役割を担うことになりました。この研究所は、サンチアゴの中心地に位置する公立病院であるサン・ボルハ病院内に設置されていますが、設立にあたり、日本政府に多大なる援助を受けることができました。おかげで、研究所は、長年にわたり最新の設備を維持しており、また日本人医師が講師として研修を行い、チリ人の医師だけでなく、ラテンアメリカ中の医師がトレーニングを受けることができました。この研修で培った交流の輪は今でも続いています。特に、チリの消化器疾患に大いなる貢献をしてくださった清成秀康先生、小池盛雄先生、渡辺英伸先生を忘れることができません。

また、東京医科歯科大学第一病理学の中村恭一教授(当時)は、日本との数々のプロジェクトのコーディネーターとして手腕を発揮され、後年、チリ政府より「ベルナルド・オヒギンズ勲章」の叙勲を受けられました。また中村教授は2011年にチリを再訪されたので、本研究所以り功労者賞を授与させていただきました。

2010年1月27日に、東京医科歯科大学、チリ保健省、CLCの間で、「大腸癌診断国家プログラム及びパイロット・ステージ・プロジェクトの実施に関する協定」が締結され、日智消化器病研究所はプロジェクトにおいて、サンチアゴにおける内視鏡センターとしての役割を担うこととなりました。(地方においては、プンタアレナスのマガジャネス病院、バルパライソのベレイラ病院が内視鏡センターとして稼働しています)。このプロジェクトでは、中村教授の教え子である江石義信教授とCLCの大腸肛門科チーフのフランシスコ・ロペス医師が中心となりスタートしています。こうして、長年の交流を経て、再び東京医科歯科大学とタッグを組むこととなりました。協定調印後には、日智消化器病研究所に2名の東京医科歯科大学の医師が派遣されています。2011年には西蔭徹郎医師が赴任し、日本式の治療技術を指導してくださいました。現在は、田中浩司医師が後任として、本研究所以で活躍されています。本プロジェクトでは、早期スクリーニングだけではなく、チリまたラテンアメリカにおける内視鏡医の育成にも取り組んでいます。過去の胃癌早期診断プロジェクトの成功が、現在の大腸癌早期診断プロジェクトの出発点となったのです。

このように、日智消化器病研究所と東京医科歯科大学は、長年にわたり、関係を深めています。今後もこの交流は続き、互いの学術・医療において、更なる発展につながっていくと自負しています。

(翻訳：四宮)



略歴：

チリ大学医学部を卒業後、チリ国営銅公社コデルコに医師として勤務。チリ北部エリアのメディカルディレクターとなり、チリ全土のメディカルディレクターに就任。1995年にコデルコを退職後、日智消化器病研究所の消化器科医となる。2006年、日智消化器病研究所所長 就任。



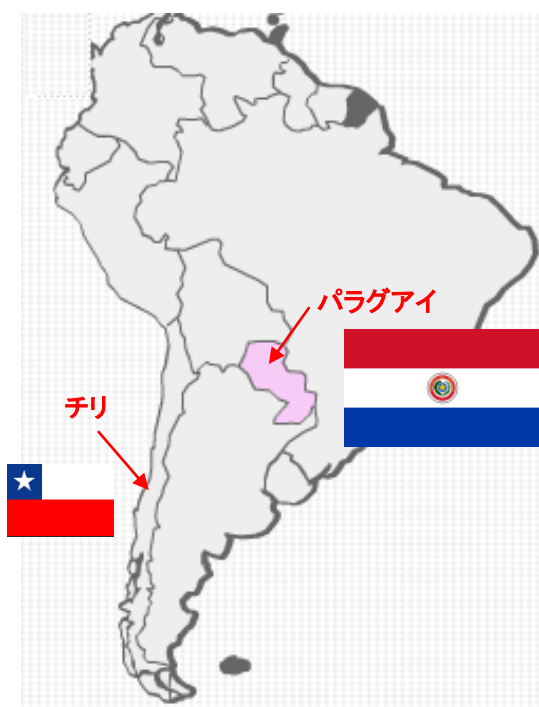
来日した際の記念写真

エステラ医師は、1997年にJICA主催の「早期胃癌と関連腫瘍コース」の研修生に選ばれ、本学の河野辰幸教授(食道・一般外科学分野)の元で研修を受けられています。この研修について、リカルド医師は「素晴らしい技術と教育システムに感銘を受けたことを今でも覚えています。特に河野先生を始め、遠藤光夫先生、竹下公矢先生、斎藤直也先生には大変お世話になりました。」とコメントされました。

活動報告

パラグアイ訪問

本学の大山喬史学長、江石義信教授、吉田丘特任教授からなる訪問団が、11月22日から26日まで、パラグアイ共和国に滞在しました。今回の訪問は、大腸癌による死亡率の増加を危惧するパラグアイ政府が、本学とCLCが実施している大腸癌早期診断プロジェクトに興味を示し、本学との面会を要請されたことにより実現したものです。パラグアイでは、フランコ大統領と面会したほか、アルボ保健福祉省大臣とのディスカッションや、アスンシオン国立大学やクリニコ公立病院などが行われました。



パラグアイの基礎情報

- ・首都 :アスンシオン
- ・言語 :スペイン語
- ・人口 :6,349,000人
(うち日系人は10,321人)
- ・大統領 :フェデリコ・フランコ大統領
(大統領は元心臓外科医)



パラグアイのフランコ大統領(左から2番目)と会談



アルボ保健福祉省大臣とのディスカッション

また、日本大使館やJICA支所の訪問、パラグアイ日系医師会関係者との会合などを重ね、情報収集を行いました。なお、本学のパラグアイ訪問は現地メディアにも取り上げられました。今後もパラグアイ政府とのディスカッションを重ねつつ、本学の中南米拠点であるLACRCからどのような支援が出来るのか 検討し、パラグアイでの大腸癌早期診断プロジェクト構築に協力していく予定です。



アスンシオン国立大学を訪問

Con apoyo japonés, pacientes accederían a colonoscopias gratis

Especialistas de Tokio participaron de la presentación del Programa de Lucha contra el Cáncer en el país, con la intención de conocer y brindar capacitación y recursos económicos para la detección precoz del cáncer de colon.

...
Ayer fue presentado oficialmente el Programa de Lucha contra el Cáncer en Paraguay «crisis» en octubre pasado que busca contar con los recursos necesarios tanto de insumos como especialistas para la detección precoz de la patología que es prevenible. El cáncer del colon a nivel mundial tiene una detección temprana en el 60% de los casos, lo que genera gastos y tratamientos costosos para el paciente. El programa tendrá como funciones esenciales formar recursos, priorizar acciones de prevención y asegurar el acceso a tratamientos en el territorio nacional. Informó el ministro Antonio Arco, durante un taller sobre la situación del cáncer de colon en Paraguay. El doctor Juan Carlos Abarrategui fue designado como encargado de la implementación. Una delegación de especialistas del Japón participó de la presentación con la intención de brindar apoyo técnico y capacitación de médicos que se encargan de los estudios necesarios, con entusiasmo para cumplir con el plan que se plantea para hacer la colonoscopia diagnóstica. Además, existe la posibilidad de instalar un plan que permita el acceso a la población de larga espera con más de 50 años o con antecedentes familiares, al inmunohistoquímica test, con el que se estudia la muestra fecal, el ADN y la sangre oculta que no se detecta a simple vista y si da positivo, se realiza la colonoscopia gratuita. En principio podrían seleccionarse unos 16.000 estudios, explicó el doctor Juan Fretes.

La delegación de japoneses visitó ayer los hospitales de Asunción y Central, como el Millar, el de Luque, el mano Claret y el del Cáncer.

El objetivo es que se lleven una buena impresión y vean que existen buenas condiciones para desarrollar ese programa. El día de mañana a Tokio y si se tiene la aprobación, encargarán a Paraguay para firmar un convenio con el Ministerio de Salud Pública (MSP), para poder poner en práctica esto que será un beneficio demandado importante para el país», afirmó Fretes.

Los especialistas solicitaron el acompañamiento científico para la justificación del proyecto y revisión de apoyo de la Sociedad Paraguaya de Gastroenterología y la Sociedad Paraguaya de Ginecología, así como de la Facultad de Medicina de la Universidad Nacional de Asunción (UNA).

Los integrantes de la Universidad Médica y Dental de Tokio son los doctores Takashi Ohgawa, Yoshinobu Ebata, Takashi Yoshida y Francisco López.



Presentación. Una delegación de japoneses participó del lanzamiento del programa.

El 90% se cura si la detección es temprana

Según la actualización en el diagnóstico y tratamiento del cáncer de colon hasta el 2007, existen 446 pacientes con cáncer de colon en Paraguay. El 54% de los pacientes proceden del interior del país y el 46% son de Central. De estos, el 47% son mujeres y el 53% varones. Un 27% de las operaciones se realizaron por urgencia y 73% fueron programadas. El 90% de los diagnósticos se da en pacientes mayores de 50 años. El 50% se cura si se diagnostica en etapa temprana, según los especialistas. El cáncer de colon ocupa el primer lugar de muerte por cáncer del tubo digestivo, empieza con un grano de nombrado «pípolo» que se convierte en un cáncer. Ocurre un pequeño sangrado que por lo general aparece a una hemorroides y anuncia y en estado tardío se trata. Este se diagnostica a través de la colonoscopia, con la intención, a través del año de todo el intestino grueso y se halla un tumor se envía para su análisis. Tras el procedimiento el patólogo es el que determina si es un cáncer. De la etapa del pípolo al cáncer hay un período de 10 años, sin embargo, la detección ya se realiza en etapas avanzadas de la enfermedad.

El tratamiento del cáncer de colon, una vez diagnosticado, depende de la etapa del tumor, en el caso del cáncer de recto necesita quimioterapia y radioterapia por lo que se realiza una cirugía.

Los diagnósticos de cáncer de colon se realizan en el Hospital de Clínicas, Hospital Nacional de Itaipu, el Hospital Militar, el Instituto Nacional del Cáncer y el IPS.

COSTOSO. En los hospitales públicos el estudio es gratuito pero el paciente debe aguardar en una lista de espera por días, meses en el sector privado, el costo promedio los C. 1.200.000.

本学訪問団に関する現地メディアによる報道

チリ訪問

訪問団は、11月19日から21日まで、チリ共和国に滞在しました。今回は、日智消化器病研究所の新内視鏡センター開所式への出席や、大腸癌集団検診プロジェクト(PRENEC)の今後の展開のため、CLCのCEOやチリ保健省との面会を実施しました。また、プロジェクトセメスターの学生による第一回進捗ミーティングや、大使公邸での夕食会などにも参加いたしました。



学生による第一回進捗ミーティング



大使公邸夕食会での記念撮影

プロジェクトセメスター学生チリ滞在記

本学は、2010年10月より、プロジェクトセメスターの課程にある医学科4年生を5カ月間にわたってチリの研究機関へ派遣しており、LACRCでは、彼らの研究・生活のサポートも行っています。今年度も、10月11日に6名の学生がチリに到着いたしました。このうち3名がCLC、3名がチリ大学の研究室に所属しています。本号より、3号に渡って、学生のチリ滞在記をお届けいたします。

遠い異国の地で

田代 燦 CLC腫瘍学・分子遺伝学研究室所属

10月にチリに到着してから、約1ヶ月ほどが過ぎました。南半球に位置するサンティアゴは、到着直後は肌寒かったものの、ここ数週間は着実に暖かくなっていて、我々はまさに本年2回目の夏を迎えようとしています。まだチリで生活し始めてから1カ月しか経っていませんが、非常に密度の濃い生活を送ることができており、毎日が新たな出会いと発見、そして驚きの連続です。

まずは僕の所属する研究室、および今までの研究の経過について簡単に紹介したいと思います。CLCにて初めて担当教官との顔合わせが終わった次の月曜日からは、本格的な研究室配属生活が始まりました。最初の1週間でやることは、知識を蓄積すること。さまざまな論文やレビューをあたり、自分のなかで理解を深めていくにつれ、自分の研究テーマに関して今までいかに無知であったかを思い知らされました。その内容について金曜日にSmall Presentationを行い、担当教官といろいろ議論を交わしながら、研究内容を定めていきました。その後デザインしたプライマーが到着するまでの間は、プロジェクトのイントロダクションを書いたり、発表に備えたりと、再びデスクワークが中心となりました。

そんなこんなでようやく実験を開始できるようになると、今度は大山学長、江石教授を迎えての進捗ミーティングが目の前に控えていました。どこの研究室の人も成果などまだ出るはずもなく、実験の概要や方法のみの発表となりましたが、各人若干緊張した面持ちで英語のプレゼンテーションを行い、しかしときに白熱した質疑応答も見せるなど、それぞれにとって大きな収穫があったのではないのでしょうか。発表の夜は非常に楽しい会食となりました。現在は目下、手を動かす実験に従事している最中です。

さて、次にこちらでの生活について述べたいと思います。話すことはおろか、第二外国語としてすらスペイン語を学習したことのない僕たちにとって、身の回りの全てがスペイン語という環境はあまりに過酷でした。最初は、日本とは比べ物にならないほど広いスー



研究室のメンバーとの一枚



大山学長、江石教授との昼食会

パーママーケットで欲しいものを見つけ、それをレジで買う、ということすらままならないレベルでした。暇を見つけてちょっとずつ勉強したりしたおかげか、それとも少しは耳が慣れてきたのか、今では買い物に困ることはあまりなくなりましたが、それでも現地人とスペイン語のみで意思疎通を図ることはまだまだ難しいです。

そんな地球の裏側の国チリですが、日本のイメージはかなり良く、日本語を勉強している学生が数多くいます。特に日本のアニメやドラマの浸透っぷりには目を見張るものがあり、我々日本人より詳しいこともしばしばで驚かされます。また、日本語を勉強しているチリの学生と交流したり、「チリ日本語弁論大会」というチリ人による日本語でのスピーチコンテストといったものを見に行ったりすることで、母国を別の角度から眺めるとはこういうことか、と気付かせられます。チリの友達とお互いにスペイン語と日本語を教えあい、どちらも困ったときは英語、というのがだいたい、これからもこの素敵な関係を大事にしていきたいなと思います。

では、まだサンティアゴでの滞在は始まったばかりですが、残りの時間も有意義に過ごしていきたいと思います。



チリ人の友人との勉強会の様子

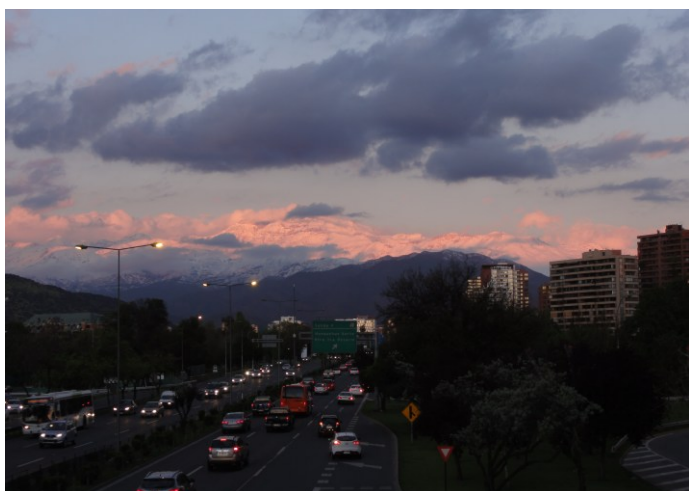
沢山の方に 支えられたチリ生活

秋山太郎 チリ大学医学部自然免疫学研究室所属

皆様こんにちは。私は現在チリ大学で自然免疫学の研究をしているマルセラ・エルモーン教授の研究室に所属し、潰瘍性大腸炎におけるIL-33の役割についての研究に携わっております。私の研究には、手術で得られた大腸の断片が必要で、なかなか研究は捗りませんが、論文を読んだりしながら日々を研究室の仲間と楽しく過ごしております。

私の研究室には十人弱の人が所属しているのですが、皆とても私に親切にしてくれます。研究室の仲間たちは、異国の地でスペイン語をしゃべれない私が孤立しないように、一緒にお昼や、おやつを買いに行こうと声をかけてくれたり、放課後にサッカーに誘ってくれたり、飲みにつれて行ってくれたりします。私が最近研究室の仲間と食べるお気に入りにはソパイピーヤです。ソパイピーヤとは、サンティアゴの路上の至る所で売っている黄色くて丸いあげパンのようなものです。一枚120ペソ(約20円)で、トウガラシのソースやマスタードをかけて食べます。私は毎日おなかが減ったらこれを仲間と買いに行きます。しかし、同じ研究室でコロンビアからの留学生は、ソパイピーヤを食べるようになって一年で5kg太ったと言っていました。太るのが心配です。

チリは日本とは違いサッカーが盛んです。学校の中にも研究室でサッカーチームがあるようで、毎週試合をしているようです。私の



夕陽を浴びるアンデス山脈



指導教官のエルモーン教授と



サンティアゴのフォレスト公園にて



仲の良い友人との夕食会

研究室の仲間も二人サッカーに参加していて、毎週熱いバトルを繰り広げております。サッカーチームは四十歳以上の人を二人入れるのが規則らしく、なんとおじさんが果敢にフェイントをかけたりしながら、相手ゴールに迫っています。私は怪我しないかひやひやしながら観戦しています。

サッカー観戦のあと、研究室の仲間は飲みにつれて行ってくれることがあります。場所は仲間の友達が経営している居酒屋で、彼はその常連です。彼にはたくさんの友達がいる、私もその輪に混ぜてくれます。そこでは、ほとんどの人は英語を話しません、酔ってしまえば言語の壁など関係ありません。とにかく盛り上がります。居酒屋でもサッカーネタは尽きません。サンティアゴのサッカーチームでコロコロというチームがあり、そのチームの応援の仕方を教えてくれたりして、一緒に盛り上がります。

週末も、優しい友達は私を遊びに誘ってくれます。ついこの間は、パナマからの留学生にサンティアゴの色々な場所を案内してもらいました。サンティアゴはとてもきれいな街です。Baquedano駅周辺をはじめ、サンティアゴの中心街にはきれいな公園、立派な美術館や建造物、銅像などがたくさんあります。彼らとチリモイヤというチリ固有の果物のアイスクリームを食べながら、これらの場所を散策しました。また、彼らと今度一緒にお互いの国のご飯を作りあって食べよう約束もしました。しかし、彼ら(彼らに限らず)に日本食の何を食べたいか聞きたいといきなり寿司かラーメンと答えます。どっちも作りようがなく困っております。

私は、チリでたくさんの親切な人々に恵まれ、彼らに支えながら日々を楽しく過ごしております。私にこのような貴重な体験をする機会を与えてくださった、江石先生、河内先生、四宮様をはじめとする東京医科歯科大学の方々と、たくさんの親切で素敵なチリの人々に多大なる感謝をします。ありがとうございます。

TMDUプロジェクトセメスターの学生によるブログのご紹介

チリ派遣学生が、自らの研究生活や異文化体験について紹介するブログを開設しています。学生たちの日々の生活が垣間見れる楽しいブログです。是非、ご覧くださいませ。

ブログ名: TMDU Project Semester in Chile!

アドレス: <http://ameblo.jp/tmduchile2012/>



編集後記

プロジェクトセメスターの学生到着後、オフィスに活気が溢れています。言葉の壁と闘いながら、研究生活や異文化体験を楽しんでいる学生の様子が、とても微笑ましい毎日です。今後もLACRCスタッフの活動や学生の留学体験記をLACRC Newsletterを通じて、ご報告してまいります。(四宮里枝子)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点 Latin American Collaborative Research Center Newsletter No. 6, November 2012

[発行日] 2012年11月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 610 3780 Fax: (56-2) 610 8610
Email: rshinomiya@clc.cl